



いるかの子ミュンチのお話

あるところに「ミュンチ」(1)という名のいるかの子がおりました。
いるかの子のくちはぴょんととがっていました。
他のいるかの子たちとくらべてもはるかにぴょんととがっていました。

ミュンチが他のいるかの子たちと遊ぼうと近寄ると、「来るな！ 寄るな！ お前のくちばしに刺されるのは、まっぴらごめんだ！」とさわぎます。「おまけにへんな顔だしな！」そう言って黒いひれをくるりとひねり、ミュンチを残したまま、どこかにおよいでいってしまいました。小さないるかの目から大粒の涙がころりころりとおふれ出て、海の水はふだんよりもっとしょっぱくなりました。母のいるかがひれでやさしくだきとめて、いるかの子をなぐさめました。「泣かない、泣かない。ミュンチ。お前はちょっと特別で、並のいるかじゃないの。いつかきっと、みんながお前のことを誇らしく思う日が来るはずだよ。」しかし、いるかの子は納得できずに口をへんの字に曲げました。への字に曲げた口は、もっともっととがって見ええました。「特別なって、何にもいいことなんかない。だって誰もぼくと遊んでくれないじゃないか。」

「こっちにおいでよ。」と姉のいるかが声をかけました。おねえちゃんはミュンチの機嫌をなおすのがうまいのです。「おじいちゃんの家まで泳ごうよ！きっとまた、私たちの知らないことを教えてくれるわ。」いるかの子はおじいちゃんのことなら何でも大好きでした。おじいちゃんの静かでよく通る声は、どんなことにも名案があるのです。その上、かなりの年寄りなのに冗談が好きで、おもしろいことを言って笑わせてくれます。毎日「イルカラジオ放送」のニュースに耳をかたむけて、新しい話題を仕入れているのです。

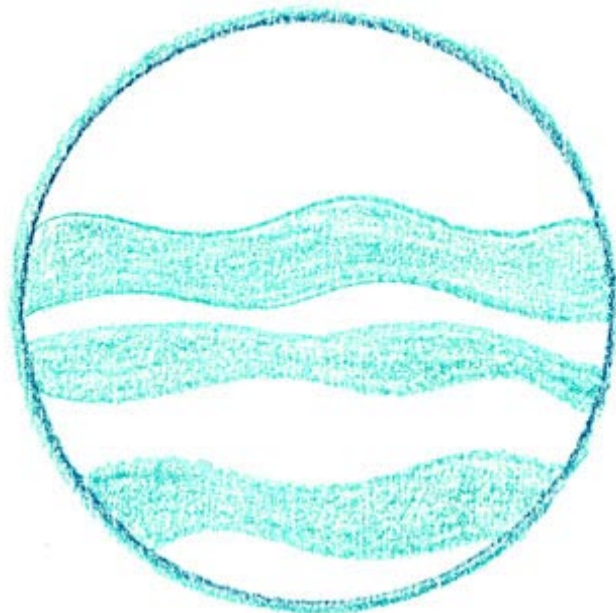
そんなおじいちゃんも今日はなんだかユーモアの種をなくしてしまった様子です。「いまましい。なんてこった！がまんがならんわい。」ブツクサと怒ってひとりごとを言い、人間なら白髪頭といった、すっかり灰色になった背びれを怒りでブルブルとふるわせています。「いったいどうしたの、おじいちゃん？」孫たちはぎょうてんして尋ねました。こんなおじいちゃんを見たのは初めてです。おじいちゃんはさっと空中一回転をして、気を静めました。「おそろしいことばかり一度に起こったんじゃ。またもやイルカが浜に打ち上げられたの、流し網にかかってまた何匹も死んでしまったのだ、そのうえ今度は1万匹以上も捕獲されるはめになったらしい。人間たちのいう、科学の目的かなんだかしらんが。」いるかの子たちはぞーっとして顔が真っ青になりました。「おお、ごめん、ごめんよ。せっかく来てくれたのにな。お話を聞かせないでこんなことを言ったら、おまえたちのおかあさんに文句を言われるところだ。」「でも、おじいちゃん。」とミュンチが叫びました。「ぼくたちの心も痛いよ。もし、人間が海をギャンギャン引っ掻き回したら！おとぎ話だって信じられなくなるよ！」「ほうほう、そうかい。」年寄りいるかは孫に圧倒されて、声も元通り、また静かで明るくなりました。「お前たち、おじいちゃんの手伝いをしてくれるかい？十二長老会議を開くことにするよ。わしらがなんとかしなくちゃな！」「うん！喜んで手伝うよ、おじいちゃん！」こどもたちは道々いつもよりたくさん空中回転をしながら飛び出してていきました。

「皆の準備ができれば、私がみつつ数えるわ。」とフィラデルフィアが呼びかけながら全員の顔を見渡しました。六名の長老紳士と六名の長老夫人が集まり、円卓を囲んでいます。ひれとひれをしっかりとつないで、十二名はさあっと空中に飛び上がりました。高いところから下を見下ろすと、世界は違って見えるものです。何もかも、もっとはつきりと目にうつり、新鮮な海の風が頭をすっきりさせてくれます。そして、とりわけ大事なことは、みんなで一緒に飛ぶと、一人で飛ぶよりはるかに高く飛び上がることができるのです！ふたたび海の底にもぐった長老各氏はあらためて円座になって考えをまとめ始めました。

他のいるかたちもこの間に十二長老会議の回りにぞくぞくと集まり、ひれをばたばたさせて新鮮な海水をあおぎいれて風通しをよくしようとしてつとめています。いつもならおしゃべりしたり、歌ったりするところですが、今は命にかかわる大事なときです。誰も何もいわず真剣です。会議の三日目にはそれまでにわかったことを公表して、問題をどう解決したらいいかを提案するのがいつものやりかたです。しかし、

今度ばかりは長老たちも何も言えず肩をすくめるばかりです。おじいちゃんが長老会議の意見をまとめました。「わたしたちにわかっていることは、人間の心が、たくさんの人間の心が閉ざされているということじゃ。心が閉じているから、わたらの愛と平和の歌も耳にはいらぬ。だからガツガツと物ばかり欲しがって、なにかというとすぐにけんか腰だ。人間はいるかを殺し、自分自身も殺しているんじや！これをどうしたものか策がたたぬ。人間の中にもまだわたらの声が聞こえるものはいる。でもほんのわずかなんじや。」おじいちゃんはふうーっとため息をついてから、「だが、時間がせまっている！」と言いはなちました。

しーんと静まり返ったいるかたちの中から、突然おおきな咳払いが聞こえました。フィラデルフィアが全身で気を奮い起こしたのです。「みなさん！」ときっぱりした声で話しかけました。「わたしが浅瀬までいって海藻をけぶらしてきます。そうしたら女神が現れるはずです。女神にお願いして助けてもらいましょう。私は女神に尋ねるつもりです。どうしたら、またふたたび人間のところに私たちのところがとどくかを。」いるかたちはとまどいながら、ひれをぱたぱたさせました。「まだ希望があるのよ！希望を捨てるのはまだはやいわ。人間にだって。わたしたちにだって。」おじいちゃんが落ち着かせようと声をかけました。「ありがとう、フィラデルフィア。きみはまた希望を与えてくれた。本当にありがとう。気をつけて行ってきておくれ。みんなで歌ってきみを送り出すよ。」愛情のこもった空中回転をしていってらっしゃいを合唱しました。



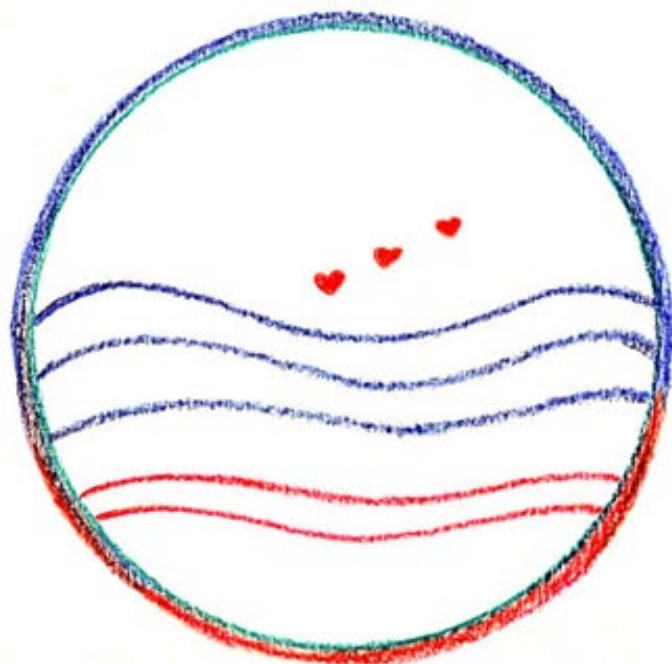
その後の三日三晩はいるかたちにとって果てしなく長い時間に思われました。ミュンチと姉いるかが興奮してフィラデルフィアの帰りを大声で知らせました。いてもたってもいられないいるかたちが空中回転を繰り返したために、海は泡ぶくだらけです。みんな緊張して報告を待っています。「みなさん。女神はわたしたちの願いを聞き入れて、返事をしてくれました。」集まった一同の背びれに身震いが走り、

みな息をひそめました。「女神は言いました。人間が寝静まった真夜中に、人間の夢の中に入っていきなさい。そして夢の中で人間にそっとキスをする。そうすれば、人間の心はまた開かれるはずだ、と。人間の夢の中にしのんでいく術をあなたがたにさずけましょう。あなたたちの誰でもいいからまず口火をきってごらんなさい。そしてみなに勇気を与えるのです。」「ほおおおうう。」いるかたちは驚きの声をあげました。「夢に入って人間にキスするんだと。誰かがまずやってみせねばならんな。。。でも、いったい誰が。」どうしたものかと皆が顔を見合わせました。

「ぼく！」かわいい高音がはっきりとさけびました。声のした方向に誰もが振り向ききました。「お前？ミュンチ？」「ぼく！」いるかの子はまた同じことを言って、みんなにぐるりと囲まれた真ん中で、ぴよんとでんぐり返りをしてみせました。「ぼくの口ってぴよんととがってるでしょ。だからぼくが一番キスがうまいと思うんだ。人間のこころにすっとはいっていけるようになんとかやってみるよ。」感動して涙を流しているおかあさんがいるかの子をだきしめました。「私にはずっと前からわかってたよ。お前がとても特別ないるかだってね。」「そうだ！」そこに集まったみんなが興奮して叫びます。「きみがまず始めてくれよ。ミュンチ！ぼくたちがきみのあとに続くから。きみのあとに続くから！」

それからというものです。人間の夢のなかにいるかが現れてキスをするようになったのは。今夜のあなたがついていたら、ミュンチが夢であなたにチュッとしにくるでしょう。ミュンチのチュッは特別なんです。特別やさしいのです。

かれらがまだ死んでいなければ、今日も元気に行っていることでしょう。かれら、そう、いるかと人間です。



(1) 「ミュンチ」はベルンドイツ語でキスの意味。

文とイラスト : ペトラ ドブロフォルニイ
日本語訳 : はやかわ ちとせ
著作権 : www.dolphinkissis.ch